

ヨーロッパ文化を散歩する——62

イタリア『自由ラジオ』の源その1「ラディオ・ポポラーレ」を訪ねて

粉川哲夫

外国の街に行ってわたしがまずやることは、その土地の詳しい地図を買うことだ。ヨーロッパの都市では、たいてい中央駅のなかか、その付近にある観光案内所で無料の市街地図をもらうことができるが、細い街路の一本一本まで記載されている地図は、キオスクか本屋で有料のものを買い求めるしかない。が、それも一つの楽しみだ。

ミラノで手に入れた地図は、ニコラ・ヴィンチトリオ社のありふれたものだったが、なぜかこの地図をたよりに歩いていると、道に迷ってしまうのだった。それは、決して不正確な地図であるわけではない。が、地図で見るとひどく幅の広い通りが、実はそれほどでもなく、そのくせ、地図ではほんのすぐそこに見えるような場所が、けっこう遠くて、歩きだしてから後悔するのである。ただし、イタリアの街には、いたるところにバーがあり、ワインやコーヒーを飲ませているので、歩き疲れたらバーに立ち寄って休むことができる。そこで、地図にまどわされたわたしは、ミラノではひんぱんにワインを飲むことになった。イタリアのバーでは、注文すればグラス一杯のシャンペンも飲めるが、普通に飲むワインは、一杯70円ぐらいしかしない。コーヒーも同じぐらいだ。

地図で見ると、パステール街は、ミラノの中央駅からすぐ近くにあるように見えた。宿に荷物を置いて身軽になったわたしは、中央駅まで地下鉄で行き、あたりを気の向くままに歩きまわったあとで、目ざすパステール街に足を向けた。それは、ミラノで最も有名な自由ラジオ局「ラディオ・ポポラーレ」(民衆のラジオ)がある場所だ。が、駅前広場(ピアッツァ・ダオスタ)から駅の長大な建物にそって歩き、右に折れてしばらくしてから地図を見てみると、まだまだ相当歩かなければならないことがわかった。これは、心理的な理由なのだろうか? ニューヨークのマンハッタンを歩いていると、相当な距離を歩いても、あっというまに着いてしまう。それが、ミラノではなかなか目的地に到達しない。

ラディオ・ポポラーレは、1970年代には、当時イタリア全土を揺がせた「自律労働者」の運動メディアとして輝かしい存在だった。わたしの編著『これが「自由」ラジオだ』(晶文社刊)には、キャシー・ローエという人のレポートがのっており、この局がやってきたことの概略がつかめる。「ラディオ・ポポラーレは、イタリアの左翼の独立放送局のなかで最も成功した例とみなされている。2つの周波数によるその放送は、市の30マイル四方で受信でき、その放送を毎日聴く者は7万人おり、少なくとも週に1回聴く者は10万人いる」。アウトノミア運動がさかんだった時期には、ラディオ・ポポラーレは「運動のラジオ局」として機能し、たとえば1978年にミラノの活動家がファシストに街頭で殺害される事件が起きると、ラディオ・ポポラーレはただちに2人の葬儀の日にストライキを行なうキャンペーンを放送し、10万人の市民が働くのをやめた。

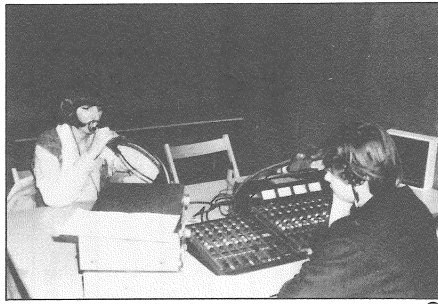
イタリアでは、1976年に国家によるFM放送帯の独占が廃止さ

れて以来、それまでは日本のNHKにあたる公共放送RAIの2局しかなかったのに、一挙に3,000局あまりの自由ラジオ局——国家の規制から自由なラジオ局——が出現し、それがいまではイタリア全土で5,000近くに達している。ミラノだけでもその数は120局もあり、FMラジオのダイヤルを回すと、全く空いた周波数というものが無いのに驚かされる。ラディオ・ポポラーレは、そうした自由ラジオ局の一つだが、イタリアの自由ラジオがみなラディオ・ポポラーレのような方向をもっているわけではなく、その90パーセントが国家から自由な——つまり民間の商業放送である。イタリアは、自由ラジオとともにはじめて商業放送が生まれたのである。これは、日本やアメリカとは異なるところだ。

さて、ヴィアレ・モンツァというやや広い通りのバーでコーヒーを飲んで歩きだすと、パステール街のプレートがすぐに見えてきた。イタリアの街路には、おびただしい数の車がパークしており、それがときには歩道を完全に塞いでいるので、車道を歩かなければならない。が、車道を歩いていると、そこへ車が敷石をきしませて驍進してくる。はじめこれがひどく神経にさわってしかたがなかったが、やがて、イタリアでは人と車の関係は戦略的なものであることに気づき、車が驍進してきても、あわててよけるようなことはしないことにした。向こうもよくしたもので、プレーキのきかせ方が実に巧妙だ。

ラディオ・ポポラーレの建物は、スクワッターたちが住んでいる建物に劣らず見すばらしく、入口のドアはピッタリと閉ざされていた。ボタンを押すと、ブザーが鳴ってドアの鍵がはずれた。なかには誰もいない。壁にはポスターがベタベタとはってあり、モニターから音楽やまくしたてるイタリア語がきこえる。そこへ2階から若い女性が駆け下りてきて、わたしを見てチャーミングな微笑をうかべた。が、彼女はそのまま入口わきのオフィスに入ってしまうおうとするので、呼びとめて用件を伝える。わたしは、あらかじめこの局のパオロ・ウッテル氏と電話で話し、ここで落ちあうことになっていた。ウッテル氏というのは、1978年に『小さなアンテナがのびる』という本を書き、政治的な自由ラジオ局に影響を与えた人である。

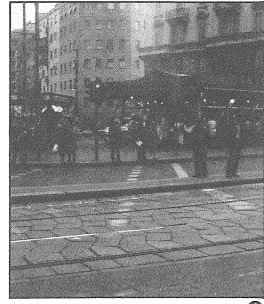
ダリオ・フォの劇団のポスターなどが見える階段を上がって2階にゆくと、ウッテル氏と名のある人が出てきて、わたしの手を握った。が、本から想像していたのとはちがいで、ひどく自信なげで、自分は今日は全く時間がないからほかの人を紹介するという。『小さなアンテナがのびる』のことを少し聞きたいだけれどと言い、話を切り出したら、「あれは、イタリアではさっぱり評判にならなかった」という。フランスでは大分評判になったでしょうと言うとウッテル氏は肩をすくめた。そこへ、フランス人的な風貌をした女性があらわれ、わたしに英語で話しかけた。いかにもわたしを知っているかのようなので、名前をたずねると、「シルヴィエよ」と言う。わたしはあわてた。というのも、この人がSilvieだとすると、わたしはこの美しい女性を女性と知らずに何度か手紙のやりとりをしてきたからである。Sil-



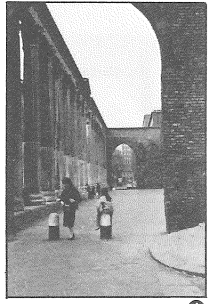
①



②



③



④

vieという名前を男性名ととりちがえたのは、アメリカに同じ名の友人がおり、その人の方はれっきとした男性だったからである。ミラノについてからわたしは、すぐ(男性と思っていた)シルヴィエに電話をしたのだが、何度自宅に電話してもつかまらなかったで、このときまでこの人の生身の姿を見ることができなかったのである。

シルヴィエの話では、ラディオ・ポポラーレのことを全体的につかんでいるのはマネージャーのセルジオ・フェレンティーノなので、自分の手がすき次第、彼を連れてくるから何でも質問しろと言う。彼女は、ここでニュース番組を担当しており、あと10分後にはオン・エアだと言う。そこで、彼女の仕事が終わるまでスタジオを勝手に見せてもらうことにした。

スタジオと言っても、別に厚い防音ドアがあるわけでもないし、壁にも吸音材をほどこしたあとはない。廊下を歩く人の声や外の音がスタジオ内でもきこえる。スタジオは、大きいのが1つと、小さいのが2つあり、他にレコード保管室兼スタジオ、おんぼろのテレックスが置いてある小部屋がある。大きいスタジオでは、女性たちが10人ぐらい集まってディスカッションをやっていた。ミキサー・ルームのような小スタジオでは、一人の女性が誰かに電話をかけてインタビューし、それをテープにおさめていた。ここで使われている電子機器は、ほとんどが日本製で、それも日本ではどこにでもあるようなカセット・デッキとマイクに、ちょっと本格的に電子楽器をいじる者ならば持っているような10チャンネル程度のミキサーといったところである。しかし、送信パワーの方は大きく、ミラノ郊外の山の上にある送信所から5キロワットのパワーでロンバルディ地方全域に電波を飛ばしている。この局は、はじめは400ワットでスタートしたのだったが、FMダイヤルに120局もの局がびっしりひしめいている今日の電波状況では、5キロワットでも他の強力な(商業的な)自由ラジオ局の干渉波に妨害されかねないのである。

フェレンティーノ氏とのインタビューは、シルヴィエがあいだに入ってくれたので円滑に進んだ。フェレンティーノ氏によると、ラディオ・ポポラーレは、プロパガンダの放送局ではなく、ニュースとディスカッションのラジオ局だという。1970年代後半にアウトノミア運動が高揚し、さまざまな反国家的な運動がイタリアの諸都市に燃えあがり、『ニュース・ウィーク』(77年8月1日号)がその表紙に「イタリアー——アナーキーに生きる」と大書きして特集するほどにまでエスカレートしていったときにも、ポポラーレの方向は同じだったし、だからこそ、さまざまな政治集団のメッセージが合流する場にもなりえたのだという。

ヨーロッパで小さな自由ラジオ局を訪れると、日本は世界に冠たるエレクトロニクスの国なのにどうして自由ラジオがさかんではないのかとたずねられることが多い。むろん、それは、第一に、イタリア人には信じられないだろうような日本の国家主義的な電波法の拘束のためなのだが、それと同時に、日本人がまだまだ相当の活字信仰をもっているからだろう。しかし、

シルヴィエによると、政治的なことであれ、ゴシップ的なことであれ、情報というのは、新聞や本について誰かが電話やラジオ/テレビで話すことによって広まるのである。いわば、読むのは、少数の人なのだ。その人が友達と電話でしゃべって読んでことを話す。それを聞いた人は、それを自己解釈してまた他の友人に話す……。『疑惑の銃弾』事件などもこうして広まった。

ラディオ・ポポラーレは、このような今日の情報回路を能動的に使っている。シルヴィエたちは、毎日、イタリア語の主要紙とフランス語のル・モンド、ヌーヴェル・オブセルヴァトゥール、英語のインター・ナショナル・ヘラルド・トリビューンなどに目を通し、抜書きを作り、それを放送で流す。また、職場や地域から電話で情報を入れてもらってそれを流すこともやる。政治的な路線や政策・姿勢などのちがいで対立が起きたグループには局の方から相方に電話をかけ、その電話をスタジオでミックスして両者に議論させたりもする。これは、ラジオを「広場」として使ううまいやり方だ。

1981年には、ミラノ近郊のサン・ヴィットーレ刑務所に未決で収容されている政治囚に番組制作をまかせ、彼らが手紙で指定してきた選曲と台本に従って番組を作り、その時間だけ「ラジオ・カスパ」というコールサインで放送を行なった。これは、刑務所内の劣悪な条件を暴露し、センセーションをまきおこした。この「ラジオ・カスパ」は、現在、獄中から「台本」を持ち出すことが以前よりむずかしくなったため、不定期にしか行なわれていないが、ラジオ・メディアをこのように使えるということは驚きである。

イタリアでラジオが、日本では信じられないような機能を果たしているのは、「情報誌」や「タウン誌」というものが少ないからではないだろうか？ ミラノにも『ヴィヴァ・ミラノ』というタウン誌があるが、これは、ラジオとは全く別の情報機能をもっているようだ。それかあらぬか、この新聞にはミラノに120局もあるラジオの番組表が全くのっていないのである。その逆に、ラジオの方は、このタウン紙にのっているコンサート情報などをそのまま読みあげたりするのであり、ポポラーレのニュースを作る部屋に行ってみたら、新聞を積み上げた棚にちゃんとこの『ヴィヴァ・ミラノ』があるのだった。ニュースには、独自に取材しなければならないものがあることは言うまでもないが、活字として流されている情報を組み合わせ、解説しなおして別のメディアで流すことによって逆に生きてくるようなものもある。イタリアの自由ラジオは、^{ミックスド}混合メディアの試みとしても画期的な要素を含んでいるように思うのである。

(批評家 こがわてつお)

写真解説: ①「ラディオ・ポポラーレ」の放送風景。

②「ラディオ・ポポラーレ」発行の身分証明書。

③④ミラノの街にて。1984年春。

ヨーロッパ文化を散歩する——⑥③

イタリア『自由ラジオ』の源その2アウトバ運動の“声”

粉川哲夫

自由ラジオの旅の次の目的地はパドバであった。ミラノで飛び乗った列車は、週末のためか、ヴェニスへ行く若者たちで一杯で、コンパートメントに空きはなく、わたしは人がいっぱいひしめく通路の一角にトランクを置いてそのうえに腰を下ろすことになった。パドバは、ヴェニスのすぐ手前で、ミラノからは2時間半かかる。わたしはまず、ミラノ駅のキオスクで買ったワインを飲み、ひと息つくことにした。ときどき通路を若者の一団が通り抜けてゆく。しばらくするとまたもどってくるころをみると、彼や彼女らは列車のなかを遊歩しているらしい。

パドバは中世の古い都市である。駅前には他の都市と同様に近代化されているが、駅から街の中心に入るとすぐ中世の古い街並みになる。細い街路の歩道にはたいいてい天蓋があり、季節によってはかなり雨の多いこの街の都市生活の必需品になっている。友人の話では、この旧市街は、かつてはヴェニスと同じような形態の運河の街であり、いま車道になっているところに川が流れていたのだという。そのためかどうかは知らないが、この街にはある種の陰うつさがある。川を潰した呪いなのかもしれない。

川を埋めたり暗渠にししたりするのは、民衆ではなくて、都市計画や都市改造を行なう支配権力である。川とは、象徴的にも実質的にも民衆同士を結びつけるメディアの性格をもっているのだが、支配権力は、それをあっさり潰してしまうのである。その意味では、川の呪いは、民衆の歴史的な呪いなのだ。

イタリアは、どの都市をとっても、民衆の自律の意志がみながっている。国家の介入には武器をとって抵抗するところまで行きかねない。ムッソリーニのファシズム時代は、イタリア人の生活のなかに国家が最も露骨な形で介入した時代であるが、それは結局、市民戦争を通じてはねのけられてしまった。国家的なものとは、イタリアでは、国家をたてまつる市民の一勢力が作り出す権力なのであり、それは、日本のように、何か“天上”に君臨するかのような力では決してない。

だから、70年代のはじめに、公共料金の値上げが決定されると、その反発はただちに工場や街頭にひろがってゆき、学生、失業者、家庭の主婦をまきこんだ大きな闘争に高まっていった。アウトノミア運動である。これについては他所(たとえば『メディアの牢獄』、晶文社を参照)でもくりかえし述べたので、ここでは省略するが、やがてこの運動がイタリア全土にひろがり、国家そのものをゆるがせるほど高揚する様相を呈したとき、権力は警察、憲兵隊そして右翼ファシストのむき出しの暴力を使ってその弾圧に努めた。

パドバは、その都市の歴史的な構造からしてもアウトノミア自律志向の強いところだが、パドバのアウトノミア運動は、文化的に自律するだけではなく軍事的にも自律すべきであるという路線を強かに推し進め、運動グループのいくつかは実際に武装の方向へ向かった。そのため、パドバにおけるアウトノミア運動への権力の弾圧は熾烈をきわめ、この運動の指導者の巣窟だという嫌疑

をかけられたパドバ大学の政治学部は、そのうちの進歩的な教師の大半が逮捕されたり国外亡命したりして、全くの骨抜きにされたのだった。

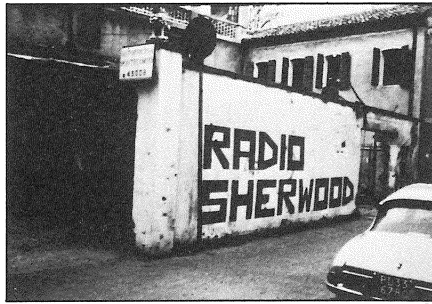
77年にピークに達したアウトノミア運動の“声”として自由ラジオ局がはたした役割はきわめて重要だが、パドバで最も戦闘的な自由ラジオ局は、ラディオ・シャーウッドである。この局も、他の例にもれず、79年の大弾圧の際には一時的な閉鎖に追いこまれたが、現在では依然として政治的にラディカルな放送を続けている。イタリアでは、電波を出すこと自体を当局が抑えることはできないから、弾圧は、ラジオ局がテロ活動をプロパガンダしたというような嫌疑をでっちあげて行なわれる。

小雨のそば降る朝、友人の案内でヴィッコロ・ポンテコルヴォのラディオ・シャーウッドの建物のまえまで来たとき、友人はわたしに合図しても陰に身をひそめた。見ると、建物の少し先に憲兵隊カラビニエレの車ボリツィアがとまっている。イタリアには警察のほかに憲兵隊があり、国家的な治安の維持の問題になるとすぐにこのカラビニエレが口を出してくる。アウトノミア運動は、79年の弾圧以後、反国家的な運動としてカラビニエレの監視下に入れられ、ラディオ・シャーウッドのような戦闘的なラジオ局に出入りする人間は、カラビニエレにマークされるわけである。

このときはさいわい、カラビニエレがすぐ去ったので、われわれはラディオ・シャーウッドの建物に近づくことができた。壁面に大きな字でRADIO SHERWOODと赤ペンキで書かれているこの建物は3階建て、2階にスタジオと集会室、3階に小劇場と水を流すと水が床にあふれ出るトイレとがある。屋上にはアンテナがそびえ立っているが、いまは、ここから直接放送しているのではなくて、郊外にある送信所まで中継電波を送信しているだけだという。

インタビューに応じてくれたのは若い2人の女性で、彼女らは、事実上この局の管理者であり、DJからニュース・アナの仕事までこなしているのだった。スタジオといっても6畳ほどの部屋が2つあるだけで、ミクサー、テープコーダー、マイクなどの機材はみな日本製であった。壁の一方にゲバラ、他方にレーニンの肖像がかかっている。この局については、すでに予備知識があったので、あまりたずねることはなかったが、このような政治的自由ラジオ局のにない手が女性であるというのは力強い。79年以後、4,000人の逮捕者を出し、事実上圧殺されたアウトノミア運動の最も有効な側面を今後発展できるのは女性たちかもしれない。アウトノミア運動の最も有効な側面の一つは、党派や綱領によらずに連帯するいわば「別個に進み、共に射て」の思想であるが、それがテロリズム的な方向に陥らないためには、フェミニズム運動のもつ非暴力運動の要素によって自己批判されなければならないだろう。その意味でも、アウトノミア運動は、男性原理にくみしない女性たちによってこそ能動化されるはずなのである。

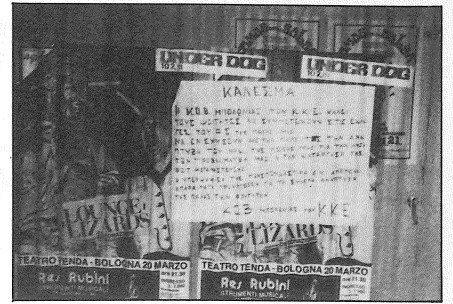
ラディオ・シャーウッドの現在の政治課題は、4,000人の政治



①



②



③

の獄中者を救援することであり、ラジオを通じてそのための集会を呼びかけ、独自に入手した情報によって監獄の劣悪な条件を暴露することに向けられている。また、パドバにおける他のもう一つの政治的ラジオ局、ラジオ・ガンマ5と協力して反核と反原発のキャンペーンを行なっている。ラジオ・ガンマ5も、ラジオ・シャーウッドと似たりよったりの小さなラジオ局(出力2kw)だが、NATOのヴェネト基地への核配備に反対するデモ行動に際しては、ラジオだけで5,000人の人間を動員することに成功したという。

イタリアの自由ラジオは、合法化されているというよりも、非合法ではないという方が正しい。それは、1976年に最高裁判決でFM波を使った無免許のラジオ放送の合法性が問われ、表現の自由を明記している憲法にてらし合わせて、国家だけが(それまでイタリアには国営に近いラジオ放送しかなかった)放送波を独占しているのは違憲であり、国家メディアとしてよりも地域メディアとしての機能をもつFM波は、市民に開放されるべきだという判決が下されたときにさかのぼるが、この最高裁判決のほかには自由ラジオを規定する制約は何もないのである。そこで、国の方は、明確な自由ラジオ法を作りたいと思っているが、国家の介入に対する抵抗の激しいイタリアでは、なかなかそれが実現しないわけである。

自由ラジオがFM波を使い、そのサービス・エリアが地域——たとえばパドバはヴェネトのレジオンに属す——の内部に限られるというのは、この最高裁判決から推論されることであって、別に明解な規定があるわけではない。そのため、最近では、ラディカル党に属するラジオ・ラディカールは、各レジオンに設置した自分の局をネットワーク化し、同一番組を全国に流している。これは、自由ラジオの従来の慣例からははずれるのだが、地域のラジオ局同士が協力してはならないということは全く規定されていないので、それを法的に抑えることはできないのである。イタリアというのはおもしろい国だ。放送出力に関しては、最初から何の制約もなされてはいなかったもので、周波数が混みあって干渉がひどくなっていくにつれて、どの局もパワー・アップするようになり、いまでは小さなところでも1kw以下というところは少ない。

数日後、わたしは、友人の車に同乗してポローニャに向かった。1時間ほどの車中、友人は自由ラジオのいくつかにダイヤルを合わせ、ニュースや情報の番組を流し続けた。彼の話では、自由ラジオが盛んになってから、車の長旅にも退屈しなくなったという。イタリアは、予想外に車社会であり、十分に歩いて行けるところでも車を使う人が多いが、運転しながら聞くことのできるラジオの機能は絶大だ。

ポローニャに着くとすぐ、駅前に車をとめて、われわれはラジオ・アンダードッグの所在地に向かった。ポローニャは、自由ラジオにとっては記念すべき都市で、1970年代にこの街で開局されたラジオ・アリチェは、“自由ラジオの星”と呼ばれ、ア

ウトノミア運動の“声”としても、また新しいコミュニケーションと表現の可能性を開いた点においても、高く評価されている。フェリクス・ガタリは、ラジオ・アリチェの理論家“ピフォ”(フランコ・ベラルディ)と親交を結び、彼の影響でラジオ・80やラジオ・トマトという自由ラジオ局をパリで開局(当時フランスでは自由ラジオは非合法)するのに加わることになる。『分子革命』の増補版に収められている「潜在する無数のアリチェ」や「1977年9月のポローニャの出会い」などを読むと、ガタリがいかにかラジオ・アリチェの活動から触発を受けたかがわかり、その影響は、ジル・ドゥルーズとの共著『千の高原』にまで深い影を落していると思われる。

アンダードッグのスタジオがあるというヴィア・リッツォーリは、ポローニャのメインストリートであり、この局の名前(アンダードッグ=負け犬)にはあまりふさわしくない。が、ラジオ・ガンマ5のスタッフがそう教えてくれたので、友人と2人で所定のハウスナンバーの建物をたずねた。そこは、大きくて優雅な共同ビルで、とても自由ラジオ局がある雰囲気ではない。守衛にたずねると、そんな局はこのあたりでは聞いたことがないという。

しかたなく、われわれは、まずバーに行き、ワインを飲んで気を静め、次の作戦を練ることにした。友人は、クラブを一杯ひっかけると、ジェットーネ(電話用硬貨)をしこたま購入し、バーの公衆電話で八方に電話をかけはじめた。が、しばらくして戻ってきた彼は、何度も「メルド(糞)……」とつぶやき、「知ってるくせに誰も教えてくれないんだ」と言った。バーを出るとき店の人にもたずねたが、「知らないね」とすげない返事だった。

おそらく、教わった住所がまちがっていたのだろうが、この街の人々がラジオ・アンダードッグに対して冷いにはわけがある。ポローニャは、イタリア共産党の本部がある都市であり、イタリアで最も共産党の力が強い街だと言われている。そのようなところで、党に反対する自律的な左翼運動が起こり、その華とも言うべきラジオ・アリチェが開局されたのだから、尋常ではない。だから、79年の大弾圧(これには共産党も協力した)後、この街では急速な“失地回復”が起こり、アウトノミアのグループが行なった街の政治的落書きもことごとく消され、ラジオ・アリチェも閉局に追い込まれた。ラジオ・アンダードッグは、いまではポローニャにおけるほとんど唯一のアウトノミア的ラジオ局なのである。わたしは、友人と別れた後、ポローニャ大学の近くを歩いていて、建物の壁に偶然この局のポスターを発見することになるのだが、そこにも、わたしはこの局の周波数しか発見することができなかった。この局は、徹底してアンダードッグ負け犬であることを選んでいるようだった。

(批評家 こがわてつお)

写真解説:①パドバのラジオ・シャーウッドの建物。

②ラジオ・シャーウッドのスタジオ内部。

③ポローニャ大学付近のポスター。UNDER DOGの文字が見える。

ヨーロッパ文化を散歩する——64

イタリア『自由ラジオ』の源その3 “運動の声”

粉川哲夫

ローマはなぜ“終着駅”(stazione termine)なのか、始発駅でもよいではないかと書いている人がいたが、わたしの今回の旅行の終着駅はローマだった。まず、例によって安宿をさがす。長期滞在ならばピアッツァ・ナヴォナかカンポ・ディ・フィオリのあたりにアパートを借りたいところだが、今回は自由ラジオ局をたずね歩くのが目的なので、駅のすぐ近くのピアッツァ・インディペンデンツァの周辺にあるホテル街に赴く。

ヴィア・パレストロで見つけたペンジオーンは、古いビルの6階にあり、資料のいっぱいしまったスーツケースをもったわたしが入ると満員になってしまう小さなエレベーターがその入口に通じている。南部なまりのイタリア語しかしゃべらないやや怪物めいた風貌の女性が2万5千リラの部屋に案内した。それは、テラスがあって明るい部屋なので泊まることにする。が、壁にはあってあるイタリア観光庁だかどこかの文書には、この部屋の宿泊費は2万リラだと書いてある。そこで、このことをその“おばさん”に告げ、2万5千リラはおかしいのではないかと言うが、予想したとおり、彼女はわけのわからぬ言葉をならべたて、わたしを煙にまこうとする。が、こちらが頑として首をたてにふるなかつたので、相手は、“パドローネ”(ボス)に話してくれと言って、メガネをかけた中年の男をつれてきた。あいそがいいこの男が言うには、イタリアの物価は年々ものすごい勢いで上がっており、この文書が発行された頃とはくらべものにならないのだという。「しかし、これは今年の日付になってるでしょう?!」とわたしが言い、公文書のゴム印の箇所を指差すと、男はあわて、「明日、別の部屋が空くから、そこなら1万5千リラでいい」と言う。こういう場合、とんでもない部屋をおしつけられる恐れがあるので、「明日部屋を見てから」という条件をつけたうえで、「じゃあ、その部屋を1週間9万リラでどう?」と切りこむ。男は、「むむ」といった感じでとまどい、「パドローネに聞いてみる」と言う。一体ここには何人パドローネがいるのかと思ったが、翌日、わたしは首尾よく、こちらの提示した価格で別のシングル・ルームを借りることができた。それは、初日に泊った部屋よりも広く、壁の文書には、「1人1日、1万8千リラ」と記されていた。

ローマには、およそ200の自由ラジオ局があり、ウォークマン・タイプのラジオではダイヤルのバンド幅が狭いので、選局に苦労することだろう。ダイヤルをほんのわずか動かしただけで隣の局が聞こえ、出力の弱い局は大きな局の干渉波にあおられて満足な状態では聞くことができない。わたしは、バンド・スプレッドが比較的広いステレオ・ラジオを持参したのだが、目あてのラジオ・オンダ・ロッサ(93.3MHz)には相当雑音が入るのだった。

ローマの自由ラジオ局のうち、政治的にラディカルな放送を行ってきたのは、このラジオ・オンダ・ロッサのほかに、ラジオ・チッタ・クトゥラとラジオ・プロレタリアがある。が、70年代のアウトノミア運動が窒息させられてからは、ラジオ・

チッタ・クトゥラは、一種の商業放送に転向し、これらのほかにもあった多くの小さな政治的ラジオ局も“運動の声”としての機能を果せなくなって閉局に追いこまれ、いまではラジオ・オンダ・ロッサとラジオ・プロレタリアだけがラジオによる政治活動を行なっている。

公共料金の値上に反対する工場労働者のストライキに端を発し、国家と労働の拒否の運動にまで突き進んだアウトノミア運動の舞台となったミラノ、パドバ、ポローニャ、ローマの街路を歩いて気づいたことは、この運動のなかで現われた落書——それはラジオとともに重要な政治的メディアだった——に対するそれぞれの都市の対応のしかたのちがいがかった。イタリアで最も商業の発達したミラノでは、いわば都市の商業化が進むなかで自然に落書が目立たなくなっていった感じがあるとすると、79年4月9日の大弾圧のときには権力によって最も強い圧力が加えられたパドバでは、アウトノミアの落書がその日にことごとく凍結され、歴史を止められたかのように当時のままの姿で残っているのであった。共産党の勢力の強いポローニャでは、大学構内や一部の路地裏を除いては、アウトノミア運動を支持する落書を街をあげて消したかのように、明らかに落書のうえに塗料をぬった壁が目についた。ローマの場合、落書の状況は他の都市とは全くちがっており、ひじょうに分散した形ではあるが、アウトノミアの落書が残っているだけではなく、いまなお書きつがれている。

各都市における落書のこうした状況は、そのまま政治的な自由ラジオ局の置かれた状況にあてはまる。ミラノのラジオ・ポポラーレは、商業主義とは別だが、ある種の大衆性を獲得してアウトノミア運動からは離れ、パドバのラジオ・シャーウッドは、権力と張りあいながら従来からの路線を堅持しようとし、ポローニャのラジオ・アリチェは消滅(消去)させられ、ローマのラジオ・オンダ・ロッサは、路線を若干修正しながらもアウトノミア運動を持続させている。

このことは、ラジオ・オンダ・ロッサの人たちと話してみても実感された。ここへわたしを案内してくれた友人は、RAI(イタリア放送協会)の職員である。自由ラジオは、RAIの電波独占に反対して登場したのであり、ラジオ・オンダ・ロッサは、反RAIの急先鋒であったはずだから、RAIの職員がラジオ・オンダ・ロッサに入出入りするなどということは、およそ考えられないことのように思われるが、そうでないところがイタリアなのである。共産党に反対して生じたアウトノミア・オペライアの活動家も、どこかで共産党とつながりをもっていることが多いが、その意味では、異質なグループがアンサンブルとして多様な結びつき方をすることによって広まったアウトノミア運動は、イタリアのこうしたアド・ホック的な連帯の伝統に由来しているのかもしれない。

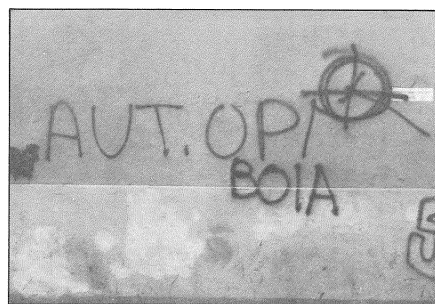
ラジオ・オンダ・ロッサは、ローマ駅に近いサン・ロレンツォ地区にある。その中心をなしているのがヴィア・デイ・ヴォルシ



①



②



③

という通りで、ローマ駅の方から歩いてきてこの通りに入るヴィア・ディ・ポルタ・ラビカーナとの角には、壁に“アウトノミア・オペライア”(AUTONOMIA OPERAIA)と書かれた落書が見える。他所で目にした落書は、ファシストたちによって書きかえられたり、消されたりしているものが多いが、この落書だけは、そのいかなる個所も、傷をつけられていないようだった。

実際、この大きな落書が入口になっているサン・ロレンツォ地区は、ローマにおけるアウトノミア活動の拠点であり、食料品店、洋品店、レストラン、パブといった一般的な店がすべてアウトノミア運動を支持しているわけではないにしても、ここは、一種の解放区になっているのだった。このあたりの建物にはその解放的な雰囲気ひかれて集まってきた若者が住み、何十軒もあるパブやレストランには、夜遅くまで若者たちの笑い声や音楽がこだましている。

ラディオ・オンダ・ロッサのスタジオは、ヴィア・デイ・ヴォルのどまんなかであり、ここには通常、アウトノミア運動を敵視する人々が近づくことはないはずなのだが、昨年、この局の玄関にダイナマイトが仕かけられ、階段の一部が壊された。ファシストのこうした攻撃から身を守るため、入口にテレビ・カメラが取り付けられ、ドアも電気式の錠でロックされている。だから、ここには、オーストラリアのコミュニティ・ラジオ局のように誰でもが気楽に出入りすることはできない。しかし、一旦なかに入ってしまうと、そこは実に解放的な広場であり、放送も、柔軟なプログラミングをしているのだった。

イタリアでは、日本のようにラジオ番組表が新聞にのこることはめったにないから、とくに自由ラジオの場合、予定の変更は日常茶飯事である。わたしは、ラディオ・オンダ・ロッサには、その現状を知るために行ったのだが、向こうの方は、日本から“めずらしい客”が来たとばかりに、そこをたずねた翌日には早くも、わたしを生放送に登場させてしまった。2回にわたる全2時間のインタビュー番組で、わたしは日本の現状について政党政治から天皇制、そして更に女性差別にいたる問題をしゃべることになったのだが、15分ぐらいいしゃべってから5分ほど音楽をかけるといったパターンを何度かくりかえしたとき、あらかじめ要所要所で告げられていた局の電話番号に一人の聴取者から電話が入り、わたしは、日本の軍事化について質問された。ヨーロッパからみると、日本は軍拡の路線を進んでおり、このままいくと、日本はふたたび戦争を起こすのではないかというのである。これについては、わたしもかねがねそう感じていたことなので、質問者の不安を強める答しかできなかった。が、「日本人は好戦的な文化をもっているのではないか？」という問いに対しては、戦争を強制するのはつねに国家であり、民衆のなかには好戦的な文化などというものはないということを主張しようとしたが、英語とイタリア語で行なわれたこのインタビューでそれがどれだけ伝わったかは確信がない。

イタリアの自由ラジオは、24時間放送しているところが多く、

夜中に再放送をやるところもある。その際、再放送のために使われている機材は、別に大それたものではなく、オート・リバーブがついた日本製のテープ・デッキなのである。24時間放送と再放送を行なうことは重要で、こうすることによって、多様な——つまりは活動時間の異なる——リスナーをつかむことができるわけである。

ラディオ・オンダ・ロッサのような“運動のラジオ”局は、運動が防御的とならざるをえなくなった状況のなかで、これまでどおりのやり方を固執することができなくなりつつある。アウトノミア運動との関係で逮捕された4,000人の政治犯を救済することは、この運動を維持するやり方の一つであり、実際にラディオ・オンダ・ロッサも監獄問題と政治囚の救援に力を入れているが、これだけでは限られたリスナーを獲得することしかできない。また、目下高まりつつある反核や反原発の闘争を70年代のアウトノミア運動のわくのなかだけでとらえることができないのも当然である。しかし、ミラノのラディオ・ポポラーレのように制度化された党の活動に対しても等距離をとろうとするのは、アウトノミアのメディアとしての性格を捨て去ることになるだろう。その意味では、かつて“運動の声”として機能した政治的自由ラジオ局は、たしかに、一つの転機に入っている。

ローマのもう一つのアウトノミアの自由ラジオ局ラディオ・プロレタリアには、ローマを離れる前日になってやっと訪問する時間ができたが、ローマ市の郊外(ヴィア・カザール・ブルキアト)の“団地”の7階にあるこの局は、テレックスを持ち、機械もラディオ・オンダ・ロッサより金がかかっているように見えた。しかし、この局の責任者の一人であるパオロ・ピエッピ氏の話では、つねに自発的な運動があり、毎土曜には必ず大きなデモがあった1970年代後半——とくに1977年——とくらべて、自由ラジオ局はいかに「政治的なコンセプト」と「大衆的なコンセプト」とを結びつけるかという問題で苦慮しているということだった。

国営に近い公共放送(RAI)しかなかった状態から、商業主義の要求と徹底的に自由な表現の要求とが同時に実現されることになったイタリアでは、いま商業主義的な自由ラジオがアメリカ並みに発達し、その分だけ政治意識の強い自由ラジオが活力を失っている。後者は、本来、商業主義的な“自由”を越えたラディカルな自由をめざすものであったはずであり、たとえばポローニャのラディオ・アリチェは、つかのまであれそれを実現したが、いまイタリアの自由ラジオが事実上、パワー・アップ競争にまきこまれていく現状では、それがもう一度かつてのラディカルさをとりもどすことはむずかしいかもしれない。むしろ、現状では、他のいかなる国の放送よりも“ラディカル”であり、自由であることにはかわりはないのだが。

(こがわてつお 批評家)

写真解説:①②③ラジオとともにアウトノミア運動の重要な政治的メディアの役割を果たす“落書”。ローマのサン・ロレンツォ地区にて。③にはファシストの手になる反アウトノミアの落書も見られる。

HALLO

NO.97

編集——欧日協会編集部
 発行所——欧日協会 EURO-JAPANESE ASSOCIATION
 東京都渋谷区桜丘町24-4 東武富士ビル
 〒150 tel.03-461-0210

発行日——昭和59年7月15日
 毎月1回15日発行
 定価——150円 年間購読料2500円(送料込)
 昭和55年7月2日第3種郵便物認可

海外レポート

9月にベルギー・ナミュールでくり広げられる“竹馬祭り”は500年の歴史を誇る民俗色豊かな祭典。河の氾濫時に竹馬を使ったことから始められたこの祭り、相手チーム全員が倒れるまで闘う激しい格闘技。



この“竹馬祭り”の存在は、市の公式文書によれば、1411年に行なわれたことが確認されているが、そもそもの起こりは、この地方を流れるムーズ河が氾濫した際に竹馬が使われ、その後これがスポーツに転じたと伝えられている。

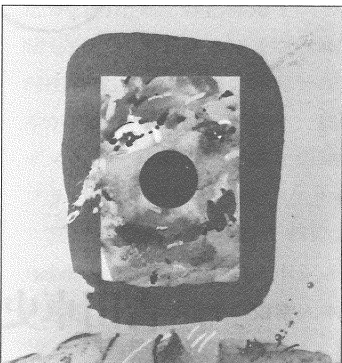
毎年9月中旬、ワロニー祭の一環としてナミュール（ブラッセル

東南約60km)のサントーバン広場(Pl. Saint Aubain)でくり広げられる。

アルファーという旗手たちに先導されて、17世紀のナミュール地方の民俗衣裳を着た竹馬の乗り手たちが太鼓の音に合わせて広場に到着する。対戦するのはメランとアブレスと呼ばれる2つのチーム、それぞれ黄と黒、赤と白に塗られた竹馬に乗り、お互いに肩で助け合いながら敵方を竹馬を使って倒していく。競技の間じゅう太鼓が打ち鳴らされ、観衆の大声援のなかで一方のチーム全員が竹馬から落ちるまで闘いは続けられる。

16世紀以来、シャルル5世、ルイ14世などVIPがこの地を訪れた際には御前試合が行なわれている。〈資料提供＝ベルギー政府観光局〉

第9(10)回ワルシャワ国際ポスター・ビエンナーレMBPが、9月15日から10月30日まで開催される。前回1982年は戒厳令下であったため中止となり、4年ぶりの本来10回目のはずの9回目のビエンナーレだ。



ビエンナーレの会場となるのは、ワルシャワの中心にある勝利の広場に面したザヘンタ美術館(PL. MALACHOWSKIEGO 3, WARSZAWA tel.277353)。このビエンナーレには、ほとんど世界中のポスター作家から、79～83年に制作された作品が数多く寄せられており、今回展示される作品は、その中の思想・社会、文化、

広告の3部門で選ばれたもの。さらにこの中から、国際審査員によって第1位から第3位までと佳作の各受賞作品が選ばれる。前回のビエンナーレでは、日本の作品が5点佳作入選しているが、前回の入選作品展も同時にワルシャワ市内の北側にあるヴィラヌフ(WIERTNICZA 1, WARSZAWA tel.428101)で開催される。

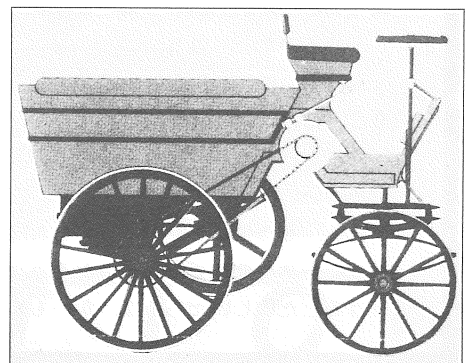
ポスターにもさまざまなお国がらがあるが、ポーランドのポスターはシンボリックでアイディアに富んでいて、見る人に謎かけでもしているような作品が主流で、イメージに訴える日本のポスターと対局をなしている。各国のポスターのプロフィールを比較してみてもたいへん興味深いものだ。

今年は、世界初の自動車が発明されたフランス人、エドワール・ドラマル・ドブットヴィルによって設計、製作されてから満100年を迎える。これを記念して、“自動車100年祭”がパリを中心に開催されている。

5月の初めには世界初の自動車、ブルヴェット社のDelamare-Debouttevilleが再現され、見事完走するなど、このイベントは快調な滑り出しを見せている。今年末にかけてのプログラムは以下の通り。

- 10月15日まで:ピュブリシテ(広告)美術館で、“自動車とパブリシティ展”
- 6月中旬～8月末:1884—1984の1世紀のショー。この展覧会では、スポーツ、スタイル、社会と経済、リサーチとテクノロジー、環境と都市生活、生産、エネルギーの7つのテーマを通じて人間と自動車のかかわり合いを描くという。グラン・パレGrand Palaisにて。
- 9月21日～10月4日:クラシック・カーによる全行程3,000kmのトゥ

- ール・ド・フランス。フランス1周レース。
- 10月4日～14日:恒例のパリ自動車ショー。ポルト・ド・ヴェルサイユ見本市会場にて。
- 12月:“自動車と漫画”レスパース・リュリユにて。



HALLO

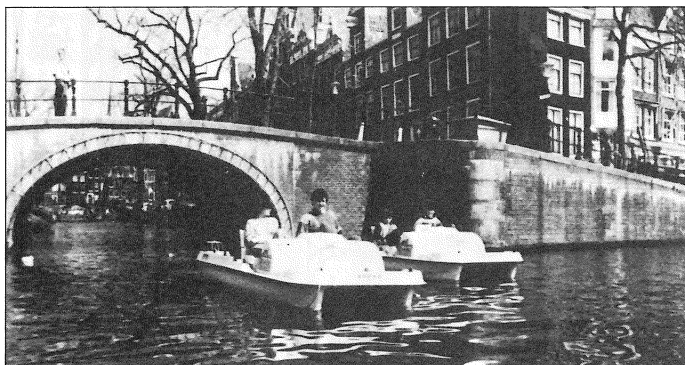
NO.98

編集——欧日協会編集部
 発行所——欧日協会 EURO-JAPANESE ASSOCIATION
 東京都渋谷区桜丘町24-4 東武富士ビル
 〒150 tel.03-461-0210

発行日——昭和59年8月15日
 毎月1回15日発行
 定価——150円 年間購読料2500円(送料込)
 昭和55年7月2日第3種郵便物認可

海外レポート

“北のヴェニス”と呼ばれるアムステルダムは古くから運河の発達した町で、その数は100をうわまわる。この運河をめぐりながら“水上散歩”を楽しんでもらおうと、「ウォーター・バイク」がお目見えした。



市内に扇状に広がる運河の中心部は400年前に建設されたもので、現在でも17世紀の商館の家並みと並木が残されており、これらは運河とともにアムステルダムの観光名所となっている。

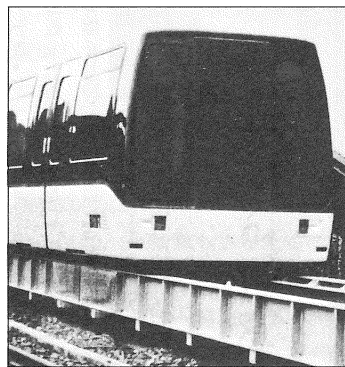
「ウォーター・バイク」は、こうした光景をゆっくり味わってもらおうというもので、バイクといっても自転車のようにペダルでこぐようになっている。4ヵ国語の運河めぐり案内が用意されているほか、コース内の標識もわかりやすくなっており、夜間は運河沿いの家並みに照明が当てられる。料金は1時間2人乗りで15ギルダー(約1,200円)、4人乗りが22.5ギルダー(約1,800円)。乗り場はアンネ・フランクの家や国立美術館など観光名所近くの4ヵ所。

1987年、西ベルリンのクロイツベルク→ティアガルテン間にリニア・モーター・カーが走る！研究開発に44億円にもものぼる巨費を投じてやっと実現の見通しがついた世界初の試みだ。

このカステラ型の車輛は、運転手も車輪もエンジンも鉄道線路も道路も必要とせず従来列車や地下鉄を越える速さを誇る。車輛自体の簡素・軽量化や地下工事の少なさなどにより、建設工事費は地下鉄の半分以下、稼働後もエネルギーは従来の鉄道より40%も節約できるという。加えてレールと車体間には常に1.5cmの空隙があり、騒音も半分くらいに抑えられる。と、いいことづくめだ。レールに磁場の移動を起し、それによって車体、レール間に生じる反発力を利用して駆動、制動するという、これこそ21世紀の乗り物にふさわしいというべきか。

世界各国ともこの方面の研究開発には余念がないが、わけてもア

ジアや中南米の低開発諸国の百万都市における過密化緩和の一助となるべく、大きな期待が寄せられている。まだまだ研究途上にあるとはいうものの、かなりの期待を持ってよいだろう。なお、早速にでも乗ってみたい方は来年筑波で開かれる科学博覧会へ行ってみよう。従来とは異なる乗り心地が味わえる筈だ。



「森林浴」という健康法が日本でも注目を集めて来たが、シュヴァルツヴァルト(黒い森)をはじめ大小さまざまな森が点在する“森林浴のメッカ”ドイツでは、全人口の4割が月に1度は森を訪れている。

森林は水害や風害から私たちを守ったり、木材を提供してくれるだけでなく、木々は日射や風などの状態を溫和に保ったり、空気を適度に湿らせたり、さらに日中の炭酸同化作用の結果、空気を浄化する働きがあるため、森林の空気は健康によいといわれている。

森の中で芳香を浴び、新鮮な空気を思い切り吸収しようという森林浴は、ヨーロッパではすでに100年も前から定着しており、ドイツでは全人口の約40パーセントが少なくとも月1回、森を訪れ、ストレスを解消し、心身ともにリフレッシュしているという。彼らにとっては森は安らぎの場、憩いの場であるといえる。

ところで、南ドイツ・バイエルン州のツヴィーゼルの町では9月15

日まで「ツヴィーゼル・ヴァンデルン(山歩き)週間」が開かれている。この特徴はなんといっても樹令400年をこす原生林を歩き森林浴を味わえることで、まったく手のつけられていない50メートルの高さにおよぶモミの木や、涼しさを呼ぶ清流が、山を歩く人たちの心身のリフレッシュを約束している。



HALLO

NO.99

編集——欧日協会編集部
 発行所——欧日協会 EURO-JAPANESE ASSOCIATION
 東京都渋谷区桜丘町24-4 東武富士ビル
 〒150 tel.03-461-0210

発行日——昭和59年9月15日
 毎月1回15日発行
 定価——150円 年間購読料2500円(送料込)
 昭和55年7月2日第3種郵便物認可

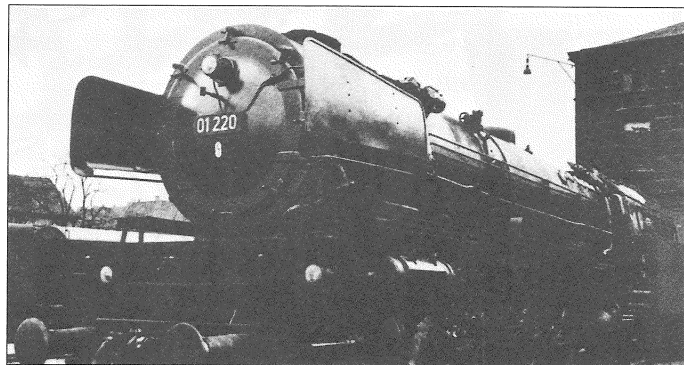
海外レポート

ニュルンベルク→フルト間にドイツで初めて蒸気機関車が走り出してから来年でちょうど150年。西ドイツ国鉄では、これを記念した“鉄道150年祭”で8年ぶりにSLを復活させ、特別列車を走らせる。

SL特別列車が運転されるのは来年5月中旬から10月頃まで。ルートは全部で8本あり、いずれもニュルンベルク中央駅を出発、全区間もしくは一部をドイツ鉄道史に残る3両の蒸気機関車(01・1100号、23105号、50 622号)が実際に客車を引っぱり、8年ぶりにその勇姿を再び鉄道ファンの前に見せる。

また、ニュルンベルクの交通博物館でも多彩な催し物が予定されており、ここに保存されているドイツ最古の蒸気機関車「アドラー号」のレプリカを実際に走らせるという計画も進められている。

SL特別列車の予約・問合せは、Deutsche Bundesbahn “Dampf 85”，Sandstr. 38-40, D-8500 Nürnberg へ。



ビール王国西ドイツを相手にEC諸国が欧州裁判所に提訴した。問題となっているのは「ビール純正法」。これは西ドイツ産のビールの品質を守るための法律だが、これが「非関税障壁」になっているという主張だ。

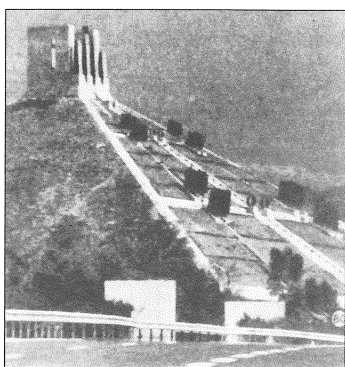
5,000種類ものビールを各地で楽しめる西ドイツのビールには、日本とちがって、人工的な混ぜものが一切入っていない。これは1516年以來の「ビール純正法」が今でも生きているからだ。純正法によると、ビールは麦芽、ホップ、酵母、水だけで造ることが規定されており、この基準は世界最古の食品保護法としても知られている。

ところがこの法律は輸入される外国産ビールにも適用されるので、原料に麦芽以外の穀物(米・トウモロコシなど)や糖分、化学添加物や合成保存剤などを使っている外国のビールは西ドイツ市場へ入ることができない。これらの添加物は生産費を安くしたり、発酵を速めたりするもので、値段も西ドイツのビールより15~20%は安い。西

ドイツのビール輸出が順調に増加しているのに比べ、輸入は横ばいのままなので、EC諸国の不満はつのるばかり。そこで事態を重視したEC委員会は、西ドイツが添加物ビールの輸入を拒否しているのはEC内の自由な交易をうたったEC条約30条違反だと、ついに欧州裁判所に提訴することになった。

それに対し西ドイツ側も「ビールはドイツの基本食品であり、国民の25%以上は毎日ビールを飲んでいる。こういう風土に添加物ビールを持ち込むのは好ましくない」と反論、外国産ビールから52種類もの添加物、さらには発ガン性の疑いのある物質を抽出したと発表するなど、徹底抗戦のかまえ。熱い「ビール戦争」は長期戦必至。

高速道路にピラミッドやナポレオンの兵隊が出現！ フランス国内を旅する人に楽しみが加わった。今年の文化プロジェクトの一環として、従来の“道”のイメージをくつがえそうという試みだ。



突然そびえ立つピラミッド(写真左)や、銃口をこちらに向けた一見ロボットのような中世の見張櫓、“死者へ”と刻まれたレジスタンス記念碑(写真右)、プロヴァンスの太陽を浴びてさん然と輝く太陽塔、ナポレオン軍の紙人形……と、こんな作品がのべ6,000kmにわたる高速道路の傍にお目見えした。

高速道路の“道”としての意味を再検討してみようというモットーでプログラムされたこの試みは、2地点を結ぶという“道”の無機的役割を、芸術文化の荷い手としてのイメージ・チェンジに、見事成功したといえるだろう。それにしてもこの創造性、このゆとり。高速でブッ飛ばしてしまうにはあまりに惜しい景観だ。

